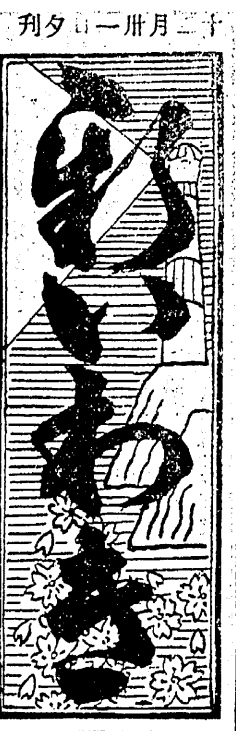




新平號



休日 日曜 祭日
一月 一月 一月
郵税十五錢 一行四〇錢
廣告料 一 行四〇錢
發行所 新平號印刷部
發行所 新平町大町五
新いわき新聞社

年頭の辭

勇ましき鶏鳴に昭和七年往きて昭和八年來たる、些の舊塵をも留めぬ癸酉の新歳を迎ふる今日、申すも畏き極みながら神々しき大内山の御儀式を初め奉り普天の下、率土の瀛裔も若きも目出度き三献の屠蘇に歡喜漂ふ吾れ等は先づ大君の聖壽萬歳を祝ぎ奉り次へて國家の無窮を祈禱し各位と共に家門の幸福を欣ぶ、顧みれば昭和七年は前年より打續ける財界の不況愈々深刻にして内には經濟受難の重壓益々甚だしく外には聯盟の審議未だに終らざる日支事變の問題あり内外共に頗る多事多難であつたが輝かしき滿洲の建國に日滿の親善を更に篤厚ならしめ國民の總意を擔つて力闘せる松岡全權の活躍は日本外交史上燦然たる光華を顯現して列國の誤れる觀察を解き正しきもの、勝利を傳へられる所となつた財界の不況も亦政府の時局匡救策に依り漸く好轉の曙光を見る然りと雖も現下の經濟難局は救濟施設によつてのみ健全なる更生の活路は開き難く併して奸譎の支那は尙ほ且つ覺る所なく善隣の誼に逆して他に親を求め依りて吾が帝國を牽制せんとする策動に意を許されざるもの多し斯て内外の諸問題は益甚大なるものあるに要意せねばならぬ而して之が解決は何物でもない國民精神の奮起にあるのみ元旦に臨んでより確乎不拔の信念を植される所に鶏鳴更に勇期なるを覺ゆ敢へて年頭の辭となす

平町主催 會同八百の祝宴

迎年に應はる餘興を添へ 劇場聚樂館に賑はふ歡

平町では例年の如く今元旦町主催を以て同町聚樂館に午前十一時から新年祝賀の名刺交換會を開き八百余の會同に定刻酒井助役の開辭に次へて青沼町長の祝辭の後宴に移り藝妓の手踊その他迎年に應はる余興の中賑はしき祝杯をあげて散會することになつてゐるが同會に於ける町長の祝辭は左記の如くである、

誼賀新年

印刷部 大庭美樹 島田鐵雄
編輯部 梅崎安彦 半谷政喜
新いわき新聞社

水道擴張事業は順調に進捗し豫期の如く工事の完成を告ぐるに至り又縣は新たに蠶業取締支所を本町に設置し以て斯業の獎勵發達に資せらる、

而して從來平、内郷、飯野一町二ヶ村水害豫防組合の管理に係る新川は時局匡救事業として近く改修工事の完成を見んとし河川法により縣費支辨川に編入の諮問は縣會の可決する所となる是れ本町

福趾増進のため寔に慶賀に堪へざるなり、如上の如く今や我が國內外多事多難國家重大の時機に際し本町もまた勲業に教育に衛生に將たまた土木に逐年施設の多きを加ふ此の秋に方り昭和の聖代に生を享く吾人の幸福何ものか之れに若くもあらんや、吾れ等國民たるもの宜しく時局に鑑み時勢の進運に伴ひ益々地方自治の機能を發揮し時代の要望に副はざるべからず不肖後進乏しきを本町長に承け其の職を汚したりと雖も元より淺學非才その器にあらず果して重任を完ふするを得るや否や、唯及ばざらんことを冀る、

希くば町民各位の援助と共に自重自愛し各其の職に努め其業に勵み協力一致國家の隆昌と本町の發展を圖り國民更生の實を擧げ以て聖代の鴻恩に副ひ奉らんことを期す聊か蕪言を陳べて祝辭とす、

西年に鳥を語るなら鶏の先祖は野生で今も南洋の林野にゐるそうだ我國に昔のまゝの地雞は鳥取、岐阜、土佐邊に僅かに現在し古事記には岩戸神樂で天照大神のお怒を鎮めまゐらせられたと云ふから其の頃からゐたものか

座講識常

入山採炭株式會社
礦業所長 吉田宗雄
石城郡湯本町

磐城炭礦株式會社
礦業所
石城郡内郷村

石城郡 銀行組合
三二三三屋肉店
平町田町 齋藤敏實

片倉製糸株式會社
平工場
電話八一番、八二番

常磐線 平運輸株式會社
良品廉賣に

釜屋商店
優る商略なし
常磐線綴驛前
鐵道公認 日野運送店

木炭検査縣移管の

「謂所」適當の時期

要求が通されぬ面當ての下相談
年度初から實施の意向

木炭検査の縣移管は本縣下適當の處置のもとに整理決
の五組合を擧げて一ヶ年延算させて欲しいと云ふ希望
期に共同戦線を張つたが其に
功空しく遂に原案を可決さ
れて唯殘る問題は縣會の希
望條件とする營業と交渉の
上適當の時期に於て實行す
ることの時間的なるも縣會
局では來四月の明年度初め
から實施し様意向の下に計
畫を進めてゐるので或る組
合の如きは要求を退けられ
た面當てに解散の内協議す
ら行はれて居り事實縣會の
即行は同業組合にとつて少
なからぬ當惑である模様を
濱通り組合の實情に上ぐれ
ば本年度豫算の二萬六千圓
は生産豫定額百七十五萬俵
が十五萬俵以上と云はれる
減産の爲めに非常な苦痛が
あり之れを半ヶ年乃至一ヶ
年延期の組合經營に任して



次り古は
鶴は古くは
鶴は古くは

石城地方の昨臘は財界好轉四十トンは昨年百十一
の聲に人氣漸く引立ち新春に比して倍以上を示し建
を迎へた賀辭の中にも今年樂用の石材二百六十噸の如
こそは景氣が來るやうだと歡喜前年同期の六十一噸に較
びを交はされてゐるが平驛へて實に四倍以上の豪勢を
に於ける去る十二月中の貨である次に飛ぶ様な賣行な
物の動きは其の爲めの響きと喜ばれた果實類の蜜柑に
かして諸雜貨類の到着は何林檎も昨年の二百二噸より
増加し殊に鹽魚の二百約一割の増加であつて總貨類の

愈よ本格的の好景氣

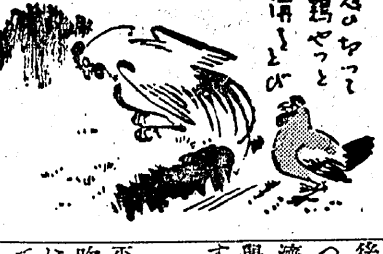
鹽魚の到着は昨年の倍以上
石材は四倍果實は一割

木炭縣營の責任轉換

「別項所報」木炭検査の縣營は前年の縣會が縣當局に從
に效があるとし福茶と云つてにあたり燈火をあげてのも正
若水で煎じた茶に梅干、蜜餞の神を祭るのも一歳の飲る。之を昔にみるに先づ松
蜀ショウを飲む習俗も生じ食を缺かさぬやうにとの念の内に來たものに萬歳、鳥
たのである。又早朝に八風願からであつたこれらの迷途、春駒、大神樂、大黒舞など
を考へてその歳暮の善惡を斷信が何時の間にかほろんどの類があつた。萬歳は一名
の年の歳徳神を拜し次に香八風と八方より、風の南ある現代にまで傳へられて素
を焚いて祖先の祠堂に拜すであれば兵衛があらんとは皮へし、いはゆる脇師であ
るの古へから傳へられたで思考したのである。又元才勝をつれてそれ、出
我等が元朝の禮節である。が、兎に角このやうに事の家々をまはり先づ新年
として元日屋敷を口にするの掃除をしないのは新たに來祝ふ時であるから此の人心とほぎ家門を祝ひ小鼓
は長命の縁起であり桃仁湯の陽氣を拂ふのを恐れたこの機微に乗じて縁起を祝ふべし面白く舞などをす
を服するのは百邪をさけるとから始まり夕に飯をたく行商や物賣の類が訪れるの、京都に來るものは

元日漫談

慣行縁起の數々
若水に心を洗ひさよ
めて先づ天照大神を初め千
萬の神、殊に恵方に祭るそ
の年の歳徳神を拜し次に香
を焚いて祖先の祠堂に拜す
るの古へから傳へられた
我等が元朝の禮節である。
住時は迷信の多い世の中
として元日屋敷を口にする
は長命の縁起であり桃仁湯
を服するのは百邪をさける



鳥は古くは
鳥は古くは

平消防の出初式

併せ優良組員の
表彰と新年祝賀
平消防組では恒例により來
る四日出初式を行ひ警鐘一
打で勢揃の上午七時から
の如く井上組頭の檢閲の

木炭高騰

濱通りの木炭相場は需用期
に這入つた昨今益々騰貴を
示し生産地元驛渡し▲難割
一俵五十五錢、同九六十五
錢、檜割五十五錢同九七十
錢、を唱へてゐる

謹賀新幸	衆議院議員 鈴木辰三郎	衆議院議員 比佐昌平	石城郡學校校長會	平町長 青沼鋒太郎	石城郡町村長一同	福島縣平土 小林立清吉	木監督所長 赤津一	石城郡勿來町 郵便局長	石城郡大浦村 渡邊金治	石城郡四倉町 新妻盛	平穀物検査支所 所長 松本己之助	平穀物検査支所 主任 吉田勝彦	平穀物検査支所 主任 丹田茂義	平穀物検査支所 主任 大塚文夫	平穀物検査支所 主任 矢野左三	平穀物検査支所 主任 二瓶勇	平穀物検査支所 主任 強口次郎	平穀物検査支所 主任 石川初代	平穀物検査支所 主任 赤津平	平穀物検査支所 主任 星源
------	-------------	------------	----------	-----------	----------	-------------	-----------	-------------	-------------	------------	------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	-----------------	----------------	---------------

景氣好轉は賀状にも

平局は二割の増加
元日に配達される二十五萬通
石相双の發着五十五萬



平局に於ける本年の賀状特報... 別取扱は非常な増加で去るあるだらうが各局共に早く廿九日で締切つた引受数は出てるのは特別扱の宣傳

四ヶ年繼續事業で

鮫川堰の復舊工事

工費總額三十六萬九千六百六十六圓
地元の寄附十三萬七千圓
石城郡の鮫川水利は明治卅一年から五ヶ年の繼續工事

新春小感

春が来た 静かな足音... 新年の朝の光りにも... 門松を戸外に、家の内には...

祝詞賀和理

平野町 佐川増蔵
元日ははれて雀の雪... 伊勢のはつばり 芭蕉



長松が親の名で来る... 御慶かな

恭賀新正

貴族院議員 金成通
飛塚高治
石城郡神谷村 佐藤久三郎
ツルヤ洋品店
野崎満藏
野崎喜八郎
石川徳壽
萩原義雄
平營業所
平製氷株式會社
平庶民金庫

磐城株式會社

磐城 工業産
平町南町 大森勇
阿部瀧藏
青木清太郎
吉田寅之助
尼忠
春の家
上總屋
栗原欣次郎
吉村安次郎
佐藤岩次郎

産業方面

副業の常識(一)

東農大出身 鈴木技師

現代の農村の何處に行つても困つた困つたと云つても一向景氣のよいと云ふ話はない。農業はあらゆる自然の要素が安んずる、野菜が安んずる、米が安んずる、野果が安んずる、何かが下つた彼に下つたのと少くとも農村から産出される總てのものは下りづくめの一の作物は鳥有に歸するから、工業の様に一種の物に多角化し、寸時の努力は、ない斯様な次第では高い生産費をかけて品を出して、みた所が収支償はず貧乏せざるを得ない行き詰まらざるを得ない。

扱つてこんな叫びを會つて聽かなかつたであらうか否や、度々聽かされてゐる、然らば將來はもう斯んな不景氣は來ないだらうか、誰とて來ないと斷言し得やう、一も巧みに配割して合理的に、農村及び農人は文化に取殘されて、惨めな生活を送らねばならぬ様に他は術、或は云ふかも知れない、其のやうなものか、果してそうならぬとすれば、農村の將來は實に暗澹たるものであらう、然し私は必ずしもそうではないと思ふ、未だ遺方の如何によつて局面を打開し、一脈の光明を見出し得るも、明に起き出でて「かりしき」と信する、然らば其の遺や緑草を刈つて自家生産肥料か、それとも他に名案でも、今では愛妻の朝寝に空費あるのかと云へば別段名案し、其代り金肥はどしどし、前業者に若干なりとも参考に、でもなく新案でもない、古借利子付で買入れて、漠然とから有りふれて稱へられた増収を夢見てゐるのでは

て來た所謂農業經營の改善ないか、而して天候不順の時、生産技術の研究と販賣組織の改良此の三つによつて空を見ては嘆息し、恢復と同等の程度まで解決し得るも、時にやれ嬉しやと思ふも、東のと思ふのである、就中二者の間、收穫の減少に次へて米は暫らく措いて農業經營と價の低落殘るものは前借利子付の肥料代と子供だけの、これは餘り同情のない酷評かも知れないが、斯んな人は農村にないではあるまい、それでありふれたと思ふ、それが農村の副産物としての養鶏を奨励する繰返して、云ふが將來の農村は其の組織を多角化し、寸時の努力も有意義に利用し、併し決して他力を當にしないこと、ある私は此の意味で多角化、その一面一角として、自給肥の増産にもなり、農家の殘渣を有利にし、努力の分配を平均化する、斯業を奨める、昨年は鶏卵の暴落で、實當一圓以下までになつたが、遂年の需要増は國民一、當り一ヶ年、要増は國民一、當り一ヶ年、四十個以上で、大正初年の十倍に、較ぶれば、非常な増し方である、恰も本年は四年で、あるのだ出すことよりも、取ることに、ある取れ、鶏を飼つて大に取れ、そして農村の更生に資せ、標題の通り、副業養鶏の常識は其の基礎を學術に置き、併せて先達各位の試験實驗の結果を引例し、私の貧弱な體驗も加へて、理解を容易にする積りで、あるが多少理論に傾くやうな所があるかも知れぬが、當に若干なりとも参考になる、幸甚である。

有煙無煙石炭
木材發賣業
高橋龜松商店
磐城平町 電話六三八番

平看護婦會 電話三〇七番

平町なかや洋服店 電話二〇三番

磐城平町 旅館組合
大角商店
電話一〇三番

平町三丁目 大谷時計店 電話一九番

平町 アヅマ美容院 電話三四五番

二丁目 會田美髮所 電話四四四番

堀江工業 江口忠一 電話五一九番

磐城平町 藝妓屋組合
料理屋組合

牛豚肉商 深谷亥八 電話五二四番

平町西洋料理組合

最新 會津桐材 流行 自製專門 小松はき物店 電話六七三番

酒 銘 稻妻 古川傳一 電話一六番

酒 銘 白萩 白萩支店 電話四四三番

酒 銘 清世界 小野晋平 電話六番

酒 銘 伊藤淺之助 石城郡飯野村

山崎登 石城郡錦村消防組頭

安島重三郎 石城郡山田村

鈴木榮 石城郡小名濱町

中島寫眞館 磐城平町 館主 中島孟

花の井一 大平陸四郎 電話五七番

磐城建物株式會社 電話五一八番

古河炭礦々業所 石城郡好間村

明雲堂眼科醫院 電話六六九番

五十嵐炭礦 不動澤礦業所 石城郡内郷村

阿部石炭商店 電話三七番

木炭移 草野米彌商店 磐城東線 小川驛前

木炭雜貨 根本庸次 石城郡勿來町 電話四一番

山崎名會社 磐城平町 電話一〇番

牛肉料理 石川亭 平町 電話四三番

多々井質店 電話五九一番

木村病院 平新川町一九番 電話一六四番

丸はん家具店 電話三五九番